

日本語ディベートにおける証拠資料使用の実態に関する一考察：証拠能力と証明力についてのアンケート調査をもとに

張, 小英
九州大学大学院地球社会統合科学府博士課程

<https://hdl.handle.net/2324/1928666>

出版情報：九州地区国立大学教育系・文系研究論文集. 5 (2), pp.No.1-, 2018-03-31. 九州地区国立大学間の連携に係る企画委員会リポジトリ部会

バージョン：

権利関係：Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives



日本語ディベートにおける証拠資料使用の実態に関する一考察

証拠能力と証明力についてのアンケート調査をもとに

張小英¹

1. はじめに

アカデミック・ディベート（ポリシー・ディベート）を行う際、主張の根拠として、出版された文献から証拠資料²を引用し議論を行なわなければならない。証拠資料はすべての議論の基礎であり、ゲーム性を持っている競技ディベートの勝敗も大きく左右する（中沢、1996）。

検索エンジンの発達により今まで以上に資料の入手がたやすくなった世界において、鵜呑みにせず情報を取捨選択することが求められるのは多言を要さない。証拠資料を引用するにあたり、証拠能力（出典の明示、原典からの直接引用、不適切な引用（不正引用）に当たらないこと）と証明力（証拠資料自体の信憑性³、証明しようとする主張との関連性）を判断する必要がある（天白、2010）。張（2017）は、JDA (Japan Debate Association) ディベート大会⁴決勝戦の文字化資料を対象に、以上の二つの側面から証拠資料の具体例を取り上げながら検証と分析を行った。その結果、出典の明示において、「著者名」「著者の肩書」「資料の発行年」という三つの項目が一般的に提示されるタイプであり、そして、JDA ディベート大会のような正式な大会でも孫引きや不適切な引用、質の低い証拠資料が存在することが明らかになった。このような現状に鑑みて、本研究は今後よりよい議論の指導を目指すための基礎研究として、アンケート調査の実施を通して、出典の明示における学生の意識、孫引きの使用状況、不適切な引用と質の低い証拠資料の使用の原因を究明することを目的とする。

2. 先行研究の概観

証拠資料の証拠能力の検証は出典の明示、直接引用、倫理的な使用（不正引用に当たらないこと）に大別される。張（2017）は、出典の明示にあたり、「著者名」「著者の肩書」「資料の発行年」の三つがより普遍的に提示されている項目であるが、証明力における専門性・権威性の判断にもつながるため、「著者の権威性」の明示も考慮すべきだと述べている。しかし、競技ディベート界独特の規範意識が存在するため、現役ディベーターには問題として

¹九州大学大学院地球社会統合科学府博士一年生。

²ポリシー・ディベートでよく使用される証拠資料は専門家の発言、雑誌、新聞、世論調査といった広くアクセスできるような文献資料である。エビデンス、データ、証拠などと呼ばれることもある。

³専門性・権威性、客観性、説得性、最新性などが含まれる。

⁴日本語によるディベートの最高峰だと目されている。また、JDA ディベート大会は、中高生に限定されたディベート甲子園とは異なり、多数の大学生、社会人、一部高校生も参加し、交流をすることが独特の魅力となっている。

意識されにくいのであろう (井上、1996)。引用方法に関して、孫引きは原典からの直接引用より間違いを犯す可能性が高いため、一次文献からの引用がより望ましいと思われるが、ディベートにおいても孫引きが使用されている。そして、証拠資料を倫理的に引用することが常に要求されているにもかかわらず、正式な大会でも、「文脈に相応しくない引用」、「不適切な省略」、「捏造」が存在することは同じく張 (2017) の研究から示されている。勝利が当座の目標 (immediate goal) だと見なされている試合 (Inoue, 1994) の現状においては、どうしても不適切な引用を孕んでしまうのだろう。

2.1 証拠資料の不適切な引用の原因

証拠資料の不適切な引用に関して、理由としてまず考えられるのは指導者 (コーチなど) による原因である。たとえば、コーチの不足 (insufficient coaching staff) や経験不足 (inexperienced coaches) (Mendes, 2014, p. 24) などが挙げられる。同じような指摘が井上 (1996)⁵の研究からも見られる。つまり、ディベートの指導者のほとんどが学校の教員ではなく、サークル内の上級生が下級生を指導するような形態だということである。また、Perry (2002) は学生たちが単なる議論を組み立てる合理的な方法だけではなく、議論を支持する証拠資料の引用方法についても教わっていないと論じている。

前述したように、検索エンジンの進歩によって、あらゆる主張や内容について検索し、出版された資料を発見できるようになった。それらの資料を使用する際に、専門性・権威性、客観性、説得性といった信ぴょう性に対する批判的な判断 (証明力)、および倫理的な引用 (証拠能力) が要求されるという点で、学術論文における先行研究の引用とディベートは共通している。したがって、ディベートにおける証拠資料の引用に関する指導が十分でなくても、普通のレポートや学術論文で引用方法を勉強すれば、不適切な引用を充分なくせると思えるが、一方、宇佐美 (1992) によると、「学生は、小・中・高を通じて、引用については何も教わっていない」 (p. 150) ということがわかる。そして、井上 (1996) は「学生のレポートを見ていても、情報の出所を明らかにする、他人の発言を引用する場合は正確に行わなければならない、といった原則が守られていない」 (p. 18) と述べており、「学生達が学校の作文 (論文) 指導において引用などについてのルールがきちんと指導されていない」 (p. 17) と指摘している。このように、証拠資料の引用に関して、日本にもアメリカなどにも、学生たちに対する指導が必ずしも充分であるとはいえない現状が存在すると推測できるであろう。また、そこからはディベーターが不適切な引用をよく認識していないのではないかと思われるかも

⁵ 日本の ESS で行われている英語ディベートの場合である。筆者がディベートクラブや大会において観察したことから、日本語ディベートの指導状況も同じだと推測できる。

しれないが、Rieke & Smith (1968) の研究から見ればそうではないようである。彼らが実施したアンケート調査の結果が示唆しているように、ディベーターはデータに関する非倫理的な使用を認識できるが、自分と相手側のチームがそれに背くような行為をさほどしていないと知っているという。

続いて、ジャッジに言及する指摘もある。Cronn-Mills & Schnoor (2000) と Williams (1997)⁶ は、競技大会参加者がジャッジや審査員の好みに合わせて、議論を進めるという側面を批判している。つまり、ジャッジは証拠資料の量しか重視していないため、パブリック・スピーキングのような場面において、競技者たちも証拠資料の質より量を優先的に考慮してしまうということである。このほか、「ディベーターの意識⁷」、出版された文献の引用に限るトーナメントの現実、ゲーム性のような特徴を持っているディベートにおける勝敗が、「勝利至上主義となる時非倫理的行為を招く」(p. 19) というような問題点も指摘されている(井上、1996)。

2.2 先行研究のまとめ

以上先行研究で示したように、出典の明示において、文字化資料でよく挙げられた項目は「著者名」「著者の肩書」「出版年」であるが、実際ディベーターがどのように考えているのかがまだ研究されていない。そして、孫引きに関しても今後より良い指導のために現状ではどのぐらい使用されているのかを把握する必要があると考えている。

証拠資料の不適切な引用に関わる様々な原因が挙げられたが、直接ディベート(特に日本語ディベート)に言及するものや具体的な実証研究が少ない。そして、証明力の判断項目が教科書でいろいろ記述されてはいるが、実際の準備や練習において、ディベーターはどのように判断しているか、これは質の低い証拠資料の使用に関連性があるかについて、まだ研究されていないようである。この点に関して、筆者は質の低い資料使用の原因を二点予測した。一つ目は、ディベーターは証拠資料を使用する前に、もともと証明力を全く判断してしない。もう一つは、判断すべき項目をある程度考慮したが、手元にある資料よりいい内容が見つからない、あるいは続けて資料を探す余裕がないなどの理由で、たとえ質があまり良くないと分かっても使用してしまうような実態もあるのではないかと考えられる。これらを踏まえ、

⁶ “Over-quantification of sources in public address events.” という論文を参照。この研究はパブリック・スピーキングに対する研究であるが、ジャッジがスピーチに関して、証拠資料の引用、質、量などの要素を評価しなければならないというところが、ディベートにおけるジャッジに求められている証拠資料に対する評価と同じだと考えられる。

⁷ 井上(1996)は、「自分達の英語力ではどうせ正確には訳せないから大体意味が通じればいだろうというような態度」、意識の拡大解釈、「彼らなりの特異な判断基準を持っている」(p. 17) というようなことを挙げている。

本研究は、ディベーターに対するアンケート調査を通じて、以下の四つの問題を究明することを目的とする。

- ①ディベーターが考えている必要な出典の項目は何か。
- ②孫引きがどのくらい使用されているのか。
- ③証拠資料が不適切に引用される原因は何か。
- ④質の低い証拠資料が使用される原因は何か。

3. アンケート調査の結果と考察

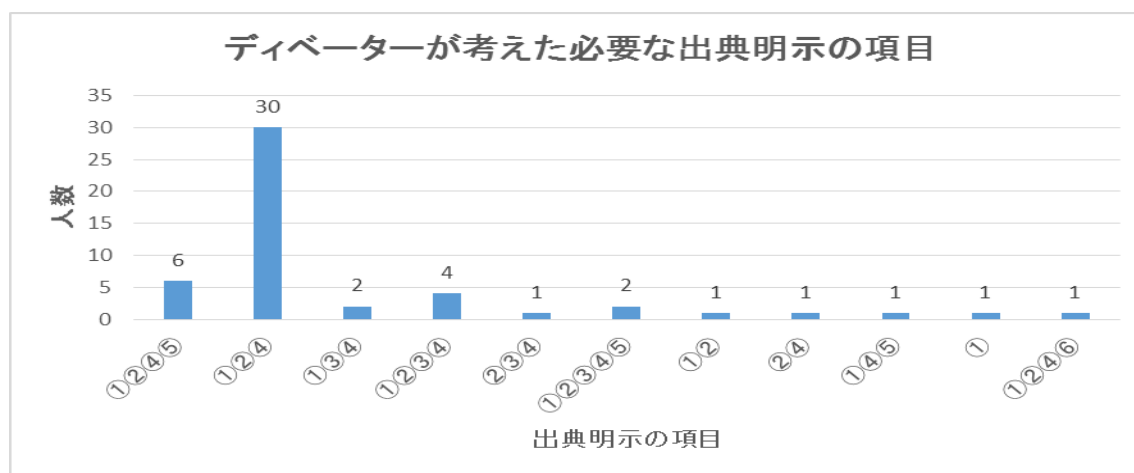
本アンケート調査は2016年10月9日に九州大学大橋キャンパスで開催された第5回QDC杯(九州大学ディベートクラブカップ)ディベート大会⁹の当日に実施したものである。大会の開会式の前に、出席したディベーターと観戦者にアンケート調査の質問用紙(付録をご参照ください)を配り、決勝戦が終了した後に回収した。有効回答数は52名であり、全員ディベートの経験者で、そのうち、23名はディベート経験が一年未満で、一年を超えている人は29人いる。以下ではそれぞれ証拠能力と証明力に対するアンケート調査の結果を報告し、それに対する考察を進める。

3.1 証拠能力に対するアンケート調査の結果と考察

この節ではディベーターにとっての必要な出典項目、孫引きの使用状況、不適切な引用の原因といった点を明らかにしたい。以下に、それぞれの設問に対する解答を示している。

3.1.1 出典の明示

図1:



⁹ 今回のアンケート調査に回答者の学年に言及するような項目が含まれていないため、中学生と高校生の選手がいるか確認できないが、参加資格としては高校生以下のチームも参加可能である。

注 1: 二人がこの質問に回答していなかった。

注 2: ①著者名、②著者の所属 (肩書)、③著者の専門、④資料の発行年、⑤出典の本、雑誌、新聞などのタイトル、⑥その他

出典を読み上げる時に必要だと思われる項目として、本調査の結果では、「①著者名」、「②著者の肩書 (所属)」、「④資料の発行年」という3つの項目だけを選択した人が最も多く、30人を占めている。理由の多くは、先生や先輩から教わったからだという。このことから、前述した通りにディベートコミュニティ内の規範意識が存在するため、ディベーターは出典の発表にあたって、ただ先輩や先生の教え通りにしているだけ、各証拠資料にとって、どんな要素の提示が必要なのか、または、どんな要素を発表すれば証明力の向上につながるかなど、自らよく判断してから発表することは少ないと理解できる。その一方、わずかながらも、「著者の専門」も読み上げる必要があると思っている人は9人いる(③が含まれた項目の合計人数)。出典の専門性・権威性が一般的に知られていれば、あるいは、どの証拠資料がディベーターに使用されるかある程度予測できる場合に、「著者の専門」を詳しく提示する必要はないが、それ以外の場合に、ジャッジや聴衆の決定者¹⁰としての立場¹¹を考慮すると、提示すべきだと解釈である(張、2017、3.1 出典の明示を参照)。なお、「著者の専門」の提示が必要とされない原因の一つとして、証拠資料を見つける際、ディベーターは著者の専門性や権威性をよく調べているため(3.2.1の図3を参照)、わざわざ読み上げなくてもいいと考えているのではないかと推察できる。しかし、このような考え方は改めるべきである。ディベーターは必ずしも同じ判断基準で専門性・権威性を評価できないため、一方が信頼している専門家が他方にとってはあまり信用できないかもしれない。そして、仮に肯定側と否定側両方とも専門家の発言を引用したとしても、実際の大会では「専門性・権威性」の比較が反駁の技法として使用されるのであるから、前提としてまず専門性を提示しなければならないだろう。

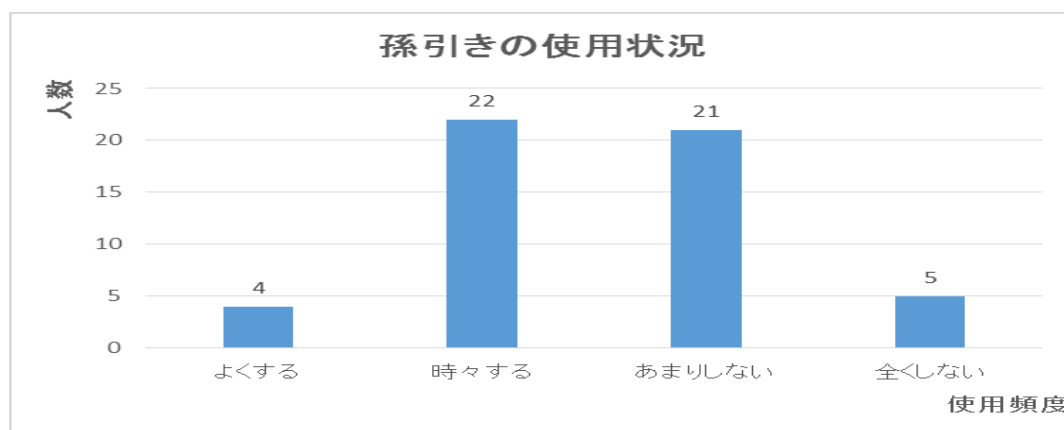
3.1.2 孫引きの使用

孫引きの使用状況を図2にまとめた。

¹⁰ JDA ディベート大会、QDC 杯ディベート大会決勝戦の場合、専任ジャッジ以外に聴衆(決勝戦に進出していないディベーター、観戦者など)も投票し、聴衆の投票数は比例配分方式で加算される。

¹¹ ジャッジと聴衆はかならずしも提示される証拠資料の「著者の専門」がわかるとは限らないため、より良い判定を下すには、まず彼らに「著者の専門」を提示すべきだということである。

図 2:



証拠資料の引用に関しては、孫引きは直接引用主義に違反しており、例外を除き、すべて認められていないようである(天白、2007)が、調査結果から、孫引きを「よくする」と「時々する」人の合計数は「あまりしない」と「全くしない」の合計と同じく 26 人存在することが判明した。その中で、全くしない人は 5 人しかいない。原文を確認することが二次文献の引用による間違いを防ぐだけでなく、証拠資料に対する全体の理解も深められるため、より望ましいと思われる。

3.1.3 不適切な引用の原因

不適切な引用(不正引用)の原因について、表 1 の「引用方法の習得と不適切な引用の指摘状況」にまとめた。

表 1: 引用方法の習得と不適切な引用の指摘状況

項目	人数
① 証拠資料の引用方法	
1) 習ったことがある	42
2) 習ったことがない	10
② 論文・レポートにおける参考文献の引用方法	
1) 習ったことがある	28
2) 習ったことがない	24
③ 証拠資料の引用方法の習得具合	
1) よく身につけている	8
2) ある程度身につけている	30
3) あまり身につけていない	4
4) まったく身につけていない	0
④ 論文・レポートの引用方法に関する習得状況	

1) よく身につけている	9
2) ある程度身につけている	13
3) あまり身につけていない	6
4) まったく身につけていない	0
⑤ 相手側の引用行為に対する信用状況	
1) 完全に信じている	6
2) やや信じている	34
3) あまり信じていない	8
4) まったく信じていない	4
⑥ 不適切な引用に対する指摘状況	
1) よくある	3
2) 時々ある	6
3) あまりしない	6
4) まったくしない	31
⑦ 不適切な引用だと指摘されたチームの反応	
1) 不適切な引用だったと認めた	6
2) 不適切な引用ではないと反論や説明をした	6
3) 以上の両方ともあった	3
4) その他	0
⑧ 不適切な引用に対する被指摘状況 (付録の質問 18 をご参照ください)	
1) よく指摘された	2
2) 時々指摘された	6
3) あまり指摘されたことがない	11
4) まったく指摘されたことがない	26
⑨ 不適切な引用だと指摘された事情 (同上)	
1) 不適切な引用であった	4
2) 自分は不適切な引用だと思っていないのにそう指摘された	11
3) 以上の両方ともあった	4
4) その他	0
⑩ 意図的な不正引用	
1) したことがある	5
2) したことがない	47

注 1: 設問によっては回答していない人もいるので、合計は必ずしも 52 人 (全体) と、46 人 (大会参加経験者) とはならない。

注 2: ③番では①番で「習ったことがある」と回答した人 (42 人) だけに回答を求めた。

注 3: ④番では②番で「習ったことがある」と回答した人 (28 人) だけに回答を求めた。

注 4: ⑥～⑨はディベートの大会に出場したことがある人 (46 人) だけに記入させた項目である。そして、⑧番に対して、大会に出場したことがある 46 人の中、一人が回答していなかった。

注 5: ⑦番では⑥番に対して、1), 2), 3) のどちらかを選択した人 (合計 15 人) だけに回答を求めた。

注 6: ⑨番では⑧番に対して、1), 2), 3) のどちらかを選択した人 (合計 19 人) だけに回答を求めた。

表 1 で示した①番と②番の引用方法に関する習得状況を確認すればわかるように、ディベートにおける証拠資料の引用ルールや方法を教わったことがあると回答した人は多い (42 人) のに対して、レポート・論文の執筆においては習ったことがない人は 52 人のうち、およそ半数 (24 人) を占めている。この点は先行研究を追認する結果となった。つまり、論文・レポートにおける参考文献の引用方法はあまり指導されていないということである。一方、ディベートにおける証拠資料の引用方法はより指導されているようであるが、両方とも、「よく身につけている」と思っている人は、それぞれわずか 8 人と 9 人しかいない。従って、ディベートにおける証拠資料の不適切な引用が発生した原因として、まず考えられるのは、コーチや学校では一定の指導を行っているが、それほど十分ではない。あるいは、ディベーター自身による受け取りや勉強が不足していると推測できる。しかし、張 (2017) が証拠能力の検証で取り上げた例を振り返ってみれば、「文章の改変」、「主張者の省略」、「捏造」などの例は明らかに知識不足ではなく、意図的な不正引用による間違いのほうがより確率が高いと思えるため、勝利獲得を過度に目的とされた結果、倫理を無視してしまうのがもう一つの原因だとも推測できる。⑩番で「今まで意図的に不適切な引用をしたことがあるか」という質問に関して、5 人だけが「ある」と認めた。うち四名が経験一年以上であった。「先生から不適切な引用をしていいと言われたことがある」と回答した人が一人いる。プライバシーや名誉に関わる問題ゆえに、全ての回答者が本当の事情を回答してくれたとは言い切れないが、その中で 5 人が認めたことは注目に値する。

続いて、「相手側のディベーターが試合では証拠資料をいつも適切に引用していると信じているか」に関して、先行研究と同じ結果が確認された。というのは、相手側を「完全に信じている」と「やや信じている」人が 40 人であり、「あまり信じていない」と「まったく信じていない」20 人より多いということである。また、ディベート大会に出場したことがある人に、不適切な引用を指摘したことと、指摘された事の回答を求めたら、「まったくない」という回答者がそれぞれ 31 人と 26 人であった (⑥番と⑧番を参照)。この点について、三つの解釈が考えられる。一つ目は、ディベーターはお互い、相手側が適切な引用をしていると信用しており、たとえ不適切な引用がたくさん存在しても、指摘しようとならないのである。すると、相手側の証拠資料の引用方法自体に大きな注目を置いていないため、意図的あ

るいは無意識に不適切な引用が発生してしまう。これは、不適切な引用の三つ目の原因だと加えられる。二つ目の解釈は、今回のアンケート調査に回答してくれたディベーターは今まで経験していた試合では、実際に不正引用があまり存在していなかったもので、彼らは常に指摘しようとしても不適切な引用がなければ、指摘できないということである。三つ目、たとえば不適切な引用が存在したとしても、ディベートのような時間制限のある口頭の試合では、その場ですべての証拠資料を相手に請求したりデータベースを検索したりすることは現実的ではないと思えるため（ディベート甲子園では携帯電話やパソコンの利用自体が禁止されている）、不適切であることが判明しなければ、指摘が難しいだろう。総じてみれば、不適切な引用を徹底的に消滅させるには、コーチや学校での引用方法の指導以外に、各自のディベーターが自ら倫理の意義や重要性を見なおさなければならない。

不適切な引用に関して、「全く指摘したことがない」と「全く指摘されたことがない」人は比較的が多いが、「指摘したことがある」人と「指摘されたことがある人」は、それぞれ15人と19人いる（あまり指摘したことがない人とあまり指摘されたことがない人を含む）。⑨番の「不適切な引用だと指摘された状況」のうち、「不適切な引用であった」と回答した人は4人であり、11人は「自分は不適切な引用だと思っていないのに、そう指摘された」と回答した。それら「両方ともあった」人は4人いる。一方、⑦番の「不適切な引用だと指摘した後、そのチームの反応はどのようなものでしたか」について、「不適切な引用だったと認めた」人と「不適切な引用ではない、と反論や説明をした」人はそれぞれ6人いる。3人が「両方ともあった」と回答した。指摘されても、本人自身は不適切な引用だと思っていないため、反論や説明をしたというのは、どちらかの側のディベーターは、引用方法がよく身につけていないため、正しい引用かどうかを認識していないのではないかと思える。それに対して、指摘されたら「不適切な引用だと認めた」人は、最初に自分たちの引用が不適切だと気づいていなかったが、相手に指摘や説明をされて初めて意識し、それを認めたという解釈はできる一方、前述したように指摘されたのはおそらく意図的に不適切な引用をしたからだとも思われる。不適切な引用の発見が難しくても、指摘したことがある人がいるということは、すでに、証拠資料の重要性を認識でき、倫理やコミュニケーションの意義をよく認識していると言えるだろう。

以上、不適切な引用の原因は、(1) 指導者による指導の不足あるいはディベーター各自の勉強不足、(2) 倫理の無視、(3) 不適切な引用があまり存在しないとディベーターはお互い信用し合っている、という三つの点にまとめられる。次節では証拠資料の証明力に対する調査結果の考察をする。

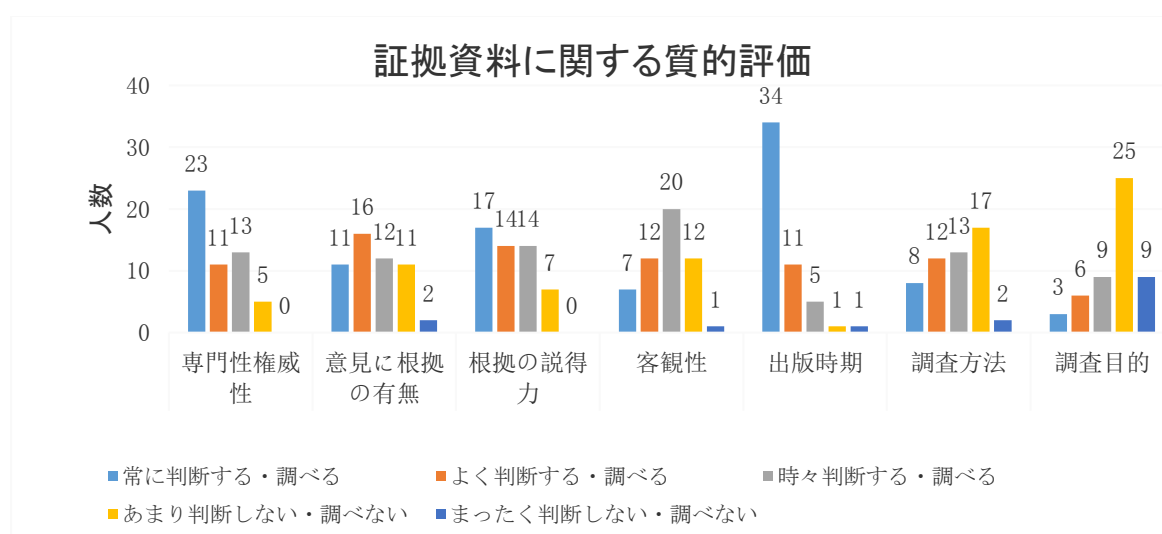
3.2 証明力に対するアンケート調査の結果と考察

この節では、ディベーターが試合にむけた準備をする際に、実際に証拠資料の「信憑性」と「主張との関連性」を十分考慮しているのか、アンケート調査の結果を通じて考察を行う。以下に図表を取り上げながら「信憑性に対する判断の実態」と「関連性に対する判断の実態」に分けて解説を加える。

3.2.1 信憑性に対する判断の実態

証拠資料の信憑性の判断について、回答人数を図3の棒グラフで表した。

図3:



証拠資料の信憑性の判断はそれぞれ「専門性・権威性」、「根拠の有無」、「根拠の説得力」、「客観性」、「最新性(出版時期)」、「調査方法」、「調査目的」という7つの項目を包括する。図3で示したように、まず、「引用する資料が専門家の意見の場合に、著者が当該領域の専門家か、あるいは権威を持っているか、を調べるか」という質問に関して、「常に調べる」と「よく調べる」人は52人のうち34人であり、半数以上を占めている。張(2017)は、文字化資料で引用された資料の執筆者がほぼ当該論題に関係する分野に従事している人だと記している。上記で述べたように著者の「専門性・権威性」は証拠資料の信憑性に関連している。おそらくこの点が認識されているため、よりよく調べられているのであろう。

証拠資料の「最新性」について、「出版時期」を「常に調べる」人と「よく調べる」人は45人を占めているものの、引用する資料が「客観性」を持っているかについて、「常に判断する」と「よく判断する」人はわずか19人しかいなく、52人のうち半数より下回ってい

る。出典の発表に暗黙の了解として日付が必要最低限の要素の一つであり、証明力の評価にも深く関わっているため、ディベーターたちはよく意識しているはずである。しかし、いくら最新の情報だとしても、客観的な視点に基づかないと、正しい主張に導けないのは言うまでもなく、ディベートに期待される教育的な効果も失われかねない。したがって、客観性の判断も重要視しなければならない¹²。

続いて、「引用する資料が著者の意見の場合に、その根拠に説得力があるのか」について、「常に判断する」と「よく判断する」人は半分以上を占めている(31人)。残りの21人はそれほど判断をしていない。証拠資料に根拠が述べられているか、根拠が説得力を持っているかは常に各論点を評価する、または、反駁に当たってのポイントになっている。にもかかわらず、アンケート調査の結果に、(意見の証拠資料に)根拠が述べられているかという質問に対して、半数の人たち(27人)は「常に調べる」あるいは「よく調べる」が、「まったく調べない」人を含み、「時々しか調べない」、「あまり調べない」人も半分ぐらい存在する(25人)。専門家の意見にも根拠の有無と根拠の説得力により、優劣のつく場合があるゆえ、これらの項目に対する慎重な判断は議論の勝敗を左右するだけではなく、批判的思考力の育成にも繋がる。

最後に、証拠資料が統計データの場合、当該調査が合理的な目的や正しい方法によって実施されたかに関して、図3からみれば、両方とも十分重視されていないということが推測できる(「常に調べる」と「よく調べる」人を含め、それぞれ9人と20人しかいない)。統計データの結果は調査目的、手段・方法などに深く依存しており、データが量的に説得できても、それに対する質的な判断を行わないと、意味のある結果にはつながらない可能性も十分ある。そのため、量的にも質的にも判断すべきだと思われる。

以上証拠資料の「信憑性」に対する判断の実態をまとめると、ディベーターは、資料を見つける時に、「専門性・権威性」と「最新性」はよく判断しているが、「客観性」、統計資料の「調査目的」と「調査方法」に関する判断はそれほど十分ではないようである。そして、証拠資料が意見の際に、根拠と根拠の説得力の有無に一定の考慮がされていたが、必ずしも十分ではないような現状も存在すると言えらる。

3.2.2 関連性に対する判断の実態

証拠資料と主張の関連性に対する判断を表2にまとめた。

表2: 証拠資料と主張の関連性

¹² この点に関して、どんな基準で客観性を見極めるかが資料の性質によって異なることが判断不足の一つの原因だと筆者は考えている。

項目	人数
望ましいと思われる証拠資料と主張の関連性	
主張が資料内で述べられている	31
自分の主張と資料の内容を自分の説明で結びつけることができる	17
自分の主張と資料の内容を別の資料で結びつけることができること	2
その他	1

注: この質問に対して、一人が未回答であった。

「引用する資料が自分の主張とどのような関連性を持っているのが望ましいか」に関して、31人が、主張が資料内で述べられたほうがより望ましいと思っており、続いて、自分の説明で証拠資料と主張を結び付ければよいと回答した人が17人いる。これは(井上、1996)が述べたように「多くのジャッジやディベーターにとって、ある論点を証明したかどうかはその主張を直接表現している引用があるかないかと同一になっている。」(p. 18)という。張(2017)も主張がほぼ証拠資料の繰り返しというような議論の組み合わせが存在すると述べている。この点を3.2.1の根拠に関する考察と合わせて考えると、意見に根拠の有無を問わず、証拠資料にディベーターが主張したい内容さえ明確に含まればそれで満足した人は一定数存在すると推測できる。主張で述べたい内容は、直接証拠資料で明示されなくても、ディベーターによる解釈で、つまり証拠資料から主張までの推論が合理的なものだと説得するために、論理的に正しい論拠をつけることで、証拠資料と主張を関連づけるのも評価される議論の技法である。ディベートを通じて、批判的・論理的思考力の育成を第一義的な目的とするなら、自ら証拠資料と主張の関連性を発見することが肝要であると思われる。

信憑性と関連性に対する判断が証拠資料を探す上に大切な役割を果たしているため、考慮すべき項目だと思われる。この点について「以上の項目が証拠資料を探す上で考慮すべき項目だと常に意識しているか」という質問でディベーターに回答を求めた。その結果、43人から「よく意識している」との回答があり、「あまり意識していない」と「全く意識していない」人が8人いた。これに基づくと、多くのディベーターはそれらの項目に対する判断が十分できていると推測できそうであるが、3.2.1と3.2.2での考察からみれば実際にはそうではないようである。

4. おわりに

本研究は、張(2017)に続き、証拠能力と証明力に関するアンケート調査を通じて、ディベートにおける証拠資料使用の実態を、(サンプルが少ないながらも)ある程度明らかにすることができたと考える。証拠能力に関して、「ディベーターが思っている明示すべき出典明

示の項目」「孫引きの使用状況」「不適切な引用の原因」という三つの側面から考察を行った。まず、出典の明示に関して、ディベートにおける規範意識が存在するため、「著者の専門」の提示が意識されていないようである。しかし、ジャッジや聴衆の決定者としての立場を考慮し、かつ「専門性・権威性」の比較を可能にするため、「著者名」「著者の肩書」「資料の発行年」以外に、「著者の専門」も提示すべきだと考えられる。そして、孫引きが半数ぐらい存在するが、より正確な引用と内容に対する深い理解を求めるからには、直接引用を多用すべきだと思われる。不適切な引用に関して、本調査で考え得る原因は次の三種類である。それぞれ指導者の指導不足あるいはディベーターの勉強不足、倫理の無視、相手側に対する信用である。これからディベートだけではなく、学術論文やレポートの執筆においても、不適切な引用を減らすためには、学生に対する倫理と引用方法の指導が非常に重要であると考えられる。

証明力における証拠資料の「信憑性」と「主張との関連性」に対する判断の実態について、調査の結果を参照しながら考察を進めた。アンケート調査の結果から、まず「専門性・権威性」「根拠の有無」「根拠の説得力」「客観性」「最新性(出版時期)」「調査方法」「調査目的」という項目は証拠資料の証明力を判断する上で重要だと多くのディベーターが認識していると考えられる(それぞれの項目に「全く判断しない」と回答した人が少数しかいない)。しかし、「専門性・権威性」「最新性」「根拠の説得力」はより判断されているものの、他の項目はあまり考慮されていないようである。この点に対して、判断の難しさを含めて考えると、これからディベートや議論を行う際に、より説得的な主張に導くためには、証拠資料の「信憑性」と「主張との関連性」をどのように判断すべきかをディベーターに具体的に指導すべきである。

最後に、本調査の限界と今後の研究課題を指摘しておく。収集したデータ数が少ないため、証拠資料の使用実態はある程度は判明したものの、今後、繰り返し調査を実施することによって結果の信憑性を高めるだけではなく、経験の深いディベーターと浅いディベーターの間に存在する相違点などの発見も期待できる。また、証明力の調査で「著者の専門」をよく調べる人は多いようであるが、彼らにとっての「専門性・権威性」はどういう基準に基づくかも興味深いところである。

引用文献

Cronn-Mills, D., & Schnoor, L. C. (2000). Evidence and ethics in individual events: An examination of an AFA-NIET final round. *National Forensic Journal*, 21(1), 35-51.

Inoue, N. (1994). *Ways of debating in Japan: Academic debate in English Speaking Societies (Doctoral dissertation, University of Hawaii)*. Retrieved from ProQuest.

- Mendes, A. (2014). Abuse of evidence in persuasive speaking: An un-conventional solution. *National Forensic Journal*, 32(1), 21-27.
- Perry, L. (2002). The need for a forensic civic virtue. *The National Forensic Journal*, 20(1), 71-73.
- Rieke, R. D., & Smith, D. H. (1968). The dilemma of ethics and advocacy in the use of evidence. *Western Speech*, 32(4), 223-233. doi:10.1080/10570316809389577
- Williams, D. (1997). Over-quantification of sources in public address events. *The Southern Journal of Forensics*, 2, 106-109.
- Winebrenner, T. C. (1995). Authority as argument in academic debate. *Contemporary Argumentation and Debate*, 16, 14-29.
- 井上奈良彦 (1996) 「ディベートと倫理——エビデンスの問題を中心に——」日本コミュニケーション研究者会議、Proceedings 1994 年 9995 年合併号、pp. 9-21.
- 宇佐美寛 (1992) 「引用無きところ印象はびこる」波多野田望 (編著)『なぜ言語技術教育が必要か 教育新書』、137-153.
- 天白達也 (2007) 「証拠資料についての総論的考察」『ディベートの争点』SDS 団 (初心者のディベーターを救う団・公式ホームページ). <http://sdsdann.web.fc2.com/souten/souten-evidence1.html>
- 天白達也 (2010) 「ディベート甲子園判定手続法の概要 (新版)——2009 年改正ルール対応——」 Law Tension Press.
- 張小英 (2017) 「日本語ディベートにおける証拠資料に関する一考察——証拠能力と証明力の検証について」、九州地区国立大学教育系・文系研究論文集、5(1).
- 中沢美依 (1996) 『教育的ディベート授業入門』 明治図書出版.

付録:

ディベートにおける証拠資料使用の実態に関する調査

2016/10/09

本日は調査にご協力いただきありがとうございます。

この調査はディベートにおいて、ディベーターによる証拠資料の引用と証拠資料の内容に関する判断の実態を明らかにすることを目的としています。

回答の内容は研究以外の目的に使用することは決してありません。また、回答者のプライバシーなどの保護に配慮し、お名前と年齢の記入を設定していないので、ぜひともありのままの事情や感想を率直に回答いただきますようお願いいたします。

この調査は強制的に実施するつもりはございませんので、無理に回答しなくても構いません。しかし、できるだけたくさんの方々のご協力を期待しておりますので、どうぞよろしく願いいたします。なお、調査の結果をご希望の方、または、ご質問のある方は下記の連絡先にお問い合わせください。

九州大学大学院地球社会統合科学府修士課程 張小英

メールアドレス:ying1228692327@gmail.com

(指導教員:九州大学言語文化研究院教授・QDC 顧問 井上奈良彦)

ご記入にあたって

1. ご記入は鉛筆あるいは黒か青のボールペンでお願いします。回答を訂正する場合、前の回答を消しゴムで消すか、棒線を引くなどしてください。
2. この調査紙には、周りの人などと相談しないで、自分が思ったとおり、独自にお答えください。
3. 質問への回答は、特に指示がない限り、選択肢番号を○で囲んでください。「その他」を選択した場合、できるだけ後の()に具体的な内容を記入してください。
4. 冊子は4ページがあり、質問は全部で 22問です。回答が終わりましたら、すべての回答欄に漏れがないかも一度ご確認ください。
5. 個人や学校に関する情報が特定される形で結果を公表されることはありません。なお、表紙下部の整理番号は資料を整理するためのものであり、この番号によって個人が特定されることはありません。

整理番号:

まず、ディベートのスピーチで引用する(使用する)証拠資料の質的判断についてお聞かせください。

1. 引用する資料が著者の「意見」の場合、著者が当該領域の専門家かどうか、あるいは権威を持っているかどうかを調べますか？

1. つねに調べる 2. よく調べる 3. 時々調べる 4. あまり調べない 5. 全く調べない

2. 引用する資料が著者の「意見」の場合、その根拠が述べられているかどうかを調べますか？

1. つねに調べる 2. よく調べる 3. 時々調べる 4. あまり調べない 5. 全く調べない

3. 引用する資料が著者の「意見」の場合、その根拠に説得力があるかどうかを判断しますか？

1. つねに判断する 2. よく判断する 3. 時々判断する 4. あまり判断しない 5. 全く判断しない

4. 引用する資料が客観性を持っているかどうかを判断しますか？

(「客観性」とは、著者や出版社等は一定の偏見を持っているのか、あるいは、特別な利害関係を持っているのかなどについて)

1. つねに判断する 2. よく判断する 3. 時々判断する 4. あまり判断しない 5. 全く判断しない

5. 引用する資料の出版時期(出版年、日付など)を調べますか？

1. つねに調べる 2. よく調べる 3. 時々調べる 4. あまり調べない 5. 全く調べない

6. 引用する資料が自分の主張とどのような関連性を持っているのが望ましいですか？

1. 自分の主張が資料内で述べられている。
2. 自分の主張と資料の内容を、自分の説明で結び付けることができる。
3. 自分の主張と資料の内容を、別の資料を用いて結び付けることができる。
4. その他(具体的に説明してください)

()

7. 資料が統計的データの場合、その調査方法(いつ・どこで・誰が・どのように調査したかなど)を調べますか？

1. つねに調べる 2. よく調べる 3. 時々調べる 4. あまり調べない 5. 全く調べない

8. 資料が統計的データの場合、調査を行った目的(特定の結論を導こうとしているかなど)を調べますか？

1. つねに調べる 2. よく調べる 3. 時々調べる 4. あまり調べない 5. 全く調べない

9. 証拠資料を調べるときに、あなたはいつも多方面から資料を探していますか？()

(インターネットの検索、図書館、書店で資料を見るなどの資料調査方法。新聞、雑誌や専門ジャーナル、単行本、などの出典の多様性。)

1. つねにそうしている 2. よくそうしている 3. あまりそうしていない 4. まったくそうしていない

10. 上の(1)から(9)の項目が証拠資料を探さうえで考慮すべき項目だと、あなたは常に意識していますか？

1. 常に意識している 2. よく意識している 3. あまり意識していない 4. まったく意識していない

次に、証拠資料の使用・引用ルールについて、お伺いします。

11. 今まで、ディベートにおける証拠資料の引用ルール(適切な引用と不適切な引用、歪曲、不適切な省略、捏造等)について習った事がありますか？

1. はい 2. いいえ

「はい」を選択した方はどこで習ったのかを教えてください。

()

また、「はい」と選択した方は、どのくらい身につけていると思いますか？

1. よく身につけている
2. ある程度身につけている
3. あまり身につけていない
4. まったく身につけていない

12. レポートや論文における参考文献の利用や引用に関するルールを習ったことがありますか？

1. はい
2. いいえ

「はい」と選択した方はどこで習ったのかを教えてください。

()

また、「はい」を選択した方は、どのくらいに身につけていると思いますか？

1. よく身につけている
2. ある程度身につけている
3. あまり身につけていない
4. まったく身につけていない

13. ディベート中で引用した証拠資料の出典を読み上げる時に、必要だと思う項目の番号をご記入ください。複数回答可です。

1. 著者名
2. 著者の所属(肩書)
3. 著者の専門
4. 資料の発行年
5. 出典の本、雑誌、新聞等のタイトル
6. その他()

また、以上の項目を選んだ理由は何ですか？

1. ディベートの先生や先輩から習ったから。
2. 他のディベートの文字化資料や動画から習ったから。
3. 今までの自分の経験でそうしているから。
4. その他()

14. 今まで、ディベートでだけではなく、論文やレポートなどを書く時に、孫引きをよくしていますか？(「孫引き」とは、本や論文などに含まれる引用を原典の記述を確認せずに再引用することです。)

1. よくする
2. 時々する
3. あまりしない
4. まったくしない

15. あなたは相手側のディベーターがディベート大会では証拠資料を適切に引用していると信じていますか？

1. 完全に信じている
2. やや信じている
3. あまり信じていない
5. まったく信じていない

1か2を選んだ人は、理由があれば、()内にご記入をお願いします。

()

16. 今までディベートの試合に参加した時、意図的に「不適切な引用」をしたことがありますか？

1. ある
2. ない

以下の(17)～(18)はディベート大会に出場したことがある人だけにお伺いします。

17. 今まで出場したディベート大会で、他のチームや審判から「不適切な引用」だと指摘されたことがありますか？

1. よく指摘された
2. 時々指摘された
3. あまり指摘されたことがない
4. 全く指摘されたことがない

1, 2, 3を選択した場合、「不適切な引用」だと指摘された状況は以下のどれに当たりますか？

1. 不適切な引用であった。
2. 自分は不適切な引用だと思っていないのに、そう指摘された。
3. 上の1と2の両方ともあった。
4. その他()

18. 今まで出場したディベート大会で、他のチームに「不適切な引用」だと指摘したことがありますか？
1. よくある 2. 時々ある 3. あまりない 4. 全くない

また1, 2, 3を選択した場合、そのチームの反応はどのようなものでしたか。

1. 不適切な引用だったと認めた。
2. 不適切な引用ではない、と反論や説明をした。
3. 上の1と2の両方ともあった。
4. その他()

最後に、回答者ご自身についてお伺いします。

19. これまでどのようなところでディベートの試合に参加しましたか。当てはまるものをすべて選んでください。

1. 授業(科目名:)
2. 課外活動
3. その他()

20. ディベートの学習や練習を始めたのはいつですか？

1. 小学生
2. 中学生
3. 高校生
4. 大学生
5. 大学卒業後

21. ディベートの経験年数(ディベート大会に出たかどうかは関係なく、試合の準備をただけでも含む)をお答えください。

約()年

22. ディベート大会に参加したことがある回答者にお伺いします。

今まで参加したディベート大会の名前を教えてください。思い出せるものをすべて書いてください。また、その中から、参加した回数が一番多い大会に○をつけてください。

() _____ () _____
() _____ () _____
() _____ () _____

以上で質問は終わりです。すべての回答欄に漏れがないかも一度ご確認ください。

調査へのご意見・ご感想などがありましたら、ぜひとも以下に自由にご記入ください。

お疲れ様でした。調査へのご協力、誠にありがとうございました。